

自転車搭載型浄水器を防災や途上国援助に役立てる

かつうら 勝浦 雄一さん 63



撮影・藤原健

顔

ペダルをこぐと、荷台のポンプが川の水を吸い上げる。3種のフィルターを通ると飲料水に変わり、1時間で300リットルできる。移動が簡単で電源も不要。川崎市の自社で7年前に製

品化した1台55万円の浄水装置が東日本大震災後、注目されている。被災地以外の学校やマンションも含め約200件の問い合わせを受け、昨年12月には新潟の長岡高専に納入した。大手合繊メーカーの家庭用浄

水器事業の責任者を務めた後、定年を迎え「発展途上国の子供たちに清潔な水を飲ませたい」と起業した。社員は自身を含めて2人だったが、国内とアジア各国で約180台を販売。ミャンマーではサイクロンの被害を受けた農村や病院で喜ばれた。

現在は、バンクアラブシユでの普及を目指す。失業した自転車タクシー運転手の脚力で飲料水を作れば、雇用対策にもなるため国際協力機構(JICA)が有望な事業と判断し、調査費約5000万円を拠出。事業化に向け今月中旬、現地へ赴く。「途上国では清潔な水がなく、大勢の子供が命を落とす。草の根の取り組みだが、少しでも貢献できれば」

(川崎支局 長谷部耕二)